

平成4年6月18日

付託受理

金沢地方検察庁



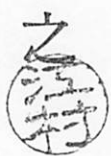
右の者に対する頭書被告事件につき、検察官が証拠により証明しようとする事実は左記
のとおりである。

平成四年六月一八日

金沢地方検察庁

検察官 検事

江村正



金沢地方裁判所 殿

記

第一 被告人の身上、経歴等

傷害、準強姦

冒頭陳述要旨

廣野秀樹

一 能登町で生まれ、高校の一年次に中退した後、地元や金沢等でガソリンスタンドの店員、造船工、自動車修理工、運転助手、運転手等をし、平成三年六月からは金沢市二口町所在の市場急配センター株式会社に長距離自動車運転手として勤務していた。

二 昭和六一年一月結婚し、長男、次男をもうけたが、平成二年六月離婚し、同年八月同じ女性と再度結婚したが、同三年八月再度離婚し、その後は元の妻が子供を養育しており、被告人は独身である。

三 少年時シンナー窃盗の前歴一件がある。

第二 被害者の身上、経歴等

被害者は、金沢市で両親の長女（兄弟は兄二人）として生まれ、昭和六三年高校を卒業後、石川県の臨時職員として県庁に勤務し、平成二年一一年ころからは前記市場急配センター株式会社に事務員として勤務していた。結婚歴はない。

第三 犯行に至る経緯等

被告人は、元の妻と離婚した平成三年八月ころから、同じ会社に勤務する被害者に好意を抱くようになり、同年一〇月ころからは、長距離運転中の出先等から会社に電話をして、同女を飲食に誘ったり、会ってくれるように言うなどしていたが、同女は被告人に対し全く好意を抱かず、これを断っていた。一方、被害者は会社においては被告人に対し他の同僚に対すると同様の態度で接していたこともあって、被告人は、

同女を諦め切れず、同年十一月ころからは被害者方に頻繁に電話をかけるようになった。このため被害者は、家族に「つき合う気はないから、電話に出たくない。」と話し、家族に不在との返答をもらっていた。被告人はその後も社外から頻繁に勤務中の被害者に電話をしていたことなどから、上司や同僚もこのことを知り、被害者も上司らに「被告人は好きでもなく、つき合う気持ちはない。交際は断っている。」と話していたことから、上司や同僚は再三被告人に対し被害者のことは諦めるように言っていた。

二 被告人は、本件当時ころも被害者に度々電話をして会うように迫っていたため、被害者はやむなく本件当日勤務終了後会社の駐車場で話をすることを承知した。同女は同日会社を出る前、上司らに対し「被告人と話するのは今度で最後にしたい。」旨話し、上司らは「一緒にの車に乗るな。」などと注意をしていた。

三 被告人と被害者は、同日勤務終了後会社の駐車場で会ったが、被害者が同所で話をしようと言ったのに対し、被告人は食事に誘い、被害者はそれぞれ自分の車で行くことを条件に仕方なくこれを承知し、同日午後五時三〇分ころから午後七時一〇分ころまでの間、同市若宮町のレストラン十字で話をした。その際被害者は被告人に対し、「交際している男性がいる。」などと言って再度交際を断った。被告人は、右の男性と交際しているとの言葉が嘘だと思い、同女の右のような言動に立腹し、人気のない

海岸付近で更に話をしようと考え、同女に対し自車に乗るように強いて、同女を自車助手席に同乗させ、同店を出て、海岸方向に走行した。

第四 犯行状況等

一 被告人は、以前被害者が会社裏駐車場に同女の車を駐車していたことについて、通常事務員は会社前の駐車場に停車しており、裏には運転手が駐車しているので、同女が同所に駐車したのは被告人から話しかけて欲しいとの意思表示である旨思い込んでいたことから、走行しながら、被害者に対し、会社裏の駐車場に駐車していたことについて問い詰めるなどした。これに対し、被害者は裏駐車場に駐車した覚えはないなどと応答していたが、被告人は、同女がとぼけていると考えて激昂し、同市松村一丁目三七五番地付近道路を走行中、助手席に座っていた同女に対し、左手拳でその顔を数回殴打したほか、同市畝田西三丁目二〇〇番地付近道路を走行中等に、同女の頭髪をつかんでその頭を押さえつけるなどし、更に、同市大野町四丁目地内の運輸省第火のついた煙草を同女の顔面に突きつけたり、「海にほうり込むぞ。」などと言ったりして脅した上、その顔を右手拳で数回殴打し、更に約二〇メートル先の、同事務所の北西約一一四メートルの路上に移動して停車し、車内でカセットケースを割ってその破片を同女の顔面に押し付けて、「顔は女の命や。真剣に話をせい。」などと言

加
字

うなどとして脅した上、右平手でその顔面を数回殴打した。その直後、被害者が車外に逃げ出そうとして助手席ドアを開け、上半身を同車左横の歩道に出し、足を車内に残す格好になるや、被告人は、助手席シートを越えて同車左横の車外に飛び出し、歩道上において、被害者が右の格好でうつ伏せとなり自らの左横に立った被告人の方に向けてやや顔を上げた際、その左顔面を右足で一回蹴り付け、その右側頭部を路上に打ち付けさせ、同女を仰向けに転倒させるなどした。被告人は、以上の暴行により、被害者に頭蓋骨等骨折、急性硬膜下血腫等の傷害を負わせ、もって平成四年四月二一日付け起訴状公訴事実記載のとりの犯行をなした。

二 被害者は、右転倒直後から右負傷のために苦しみ出して、意識もうろうの状態となり、わずかに応答はできたものの、自力では歩行もできなくなった。被告人は同女を抱きかかえて自車助手席シートに寝かせ、右負傷の状況から病院に連れて行かなければならないと思い、一旦金沢西警察署前まで至ったが、同所において、同女に対し再度会社裏の駐車場に停車したことがないかと問い詰めると、同女が同様に知らない旨答えたため、同女が強情を張っていると憤慨し、この際同女が右負傷により意識もうろうの状態で抗拒不能の状態にあるのに乗じて同女を姦淫しようと決意し、自車をユーターンさせて、同市普正寺町九番地犀川左岸金石港船引上げ場横空地に至った。被告人は、同所に停車した自車の車内において、全く抵抗不能の状態にある同女を身体

をかかえて、その上半身を助手席にその下半身を運転席になるように寝かせた上、同女に対し、平成四年五月二五日付け起訴状公訴事実記載のとおり、犯行をなした。

第五 犯行後の状況等

被告人は、右犯行後、同空地を出ようとした際、同女が目が見えない旨言ったことなどから、重傷と知り、同日午後八時二三分ころ、被害者を自車に乗せたまま金沢西警察署に至り、自首するとともに、被害者の病院収容を依頼した。当直警察官が、被害者が顔面血まみれの状態と同車の助手席に横たわっているのを確認して、直ちに救急車の手配をし、これが到着するまでの間に同女に質問したところ、同女はわずかに返答し、被告人に殴打されて負傷したことを申し立てた。被害者は、救急車に収容以降は全く応答がなくなって、意識不明の重態となり、手術を受けたものの、その後も意識不明の状態が続いている。

第六 その他情状